

翻訳通信

翻訳と読書、文化、言葉の問題を幅広く考える通信

目次

翻訳講義（第2回）

山岡洋一

- 名訳を読む

今回は新しい本で翻訳の面白さを考える方法を紹介する。それは、一流のものを見る方法、一流の翻訳家が訳した本と原著を比較していく方法だ。

私的ミステリ通信（第6回）

仁木めぐみ

- 「時の娘」の母

歴史ミステリの不朽の名作『時の娘』の生みの親であるジョセフィン・テイの多彩な魅力を紹介する。

誰も教えてくれなかった英語（第11回）

柴田耕太郎

- おろそかにされがちな語法 その

意識せずとも大抵の場合はつつがなく訳せる。だが、きちんと理解しておかないと訳のあいまいさやずれ、はては誤訳をきたしかねない文法のエッセンスを、思いつくまま並べる。

名訳

須藤朱美

- アラン・ターニー訳『THE THREE-CORNERED WORLD』

訳書自体が独立した芸術作品として感じられる崇高な一冊、ターニー氏の『The Three-concerned World』を紹介する。

翻訳通信 〒216 川崎市宮前区土橋4-7-2-502 山岡洋一 電子メール GFC01200@nifty.ne.jp

『翻訳通信』は有料会員制の媒体にする予定ですが、当面はテスト期間として無料で配信します。

定期購読の申し込みと解除 <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

知り合いの方に『翻訳通信』を紹介いただければ幸いです。

『翻訳通信』を見本として自由に転送下さい。

バックナンバー <http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/index.html>

名訳を読む

前回は主に、ひとつの原著を訳した複数の翻訳を比較する方法を紹介しました。この方法を使うと、翻訳がいかにも多種多様かが分かり、翻訳の面白さが分かるはずですが、しかし、この方法には限界もあることもお話ししました。最大の問題は、複数の翻訳がでている本がそう多くなく、普通は古典と呼ばれているものだけであることです。もっと新しい本で翻訳について考えてみたい場合には、この方法は使えないのです。

そこで今回はもっと新しい本で翻訳の面白さを考える方法を紹介します。それは、一流のものを見る方法、一流の翻訳家が訳した本と原著を比較していく方法です。

これはどんな仕事でも使える方法、というよりも、どんな仕事でも使わなければならない方法を翻訳に応用したものです。少々脱線になりますが、一流のものを見る方法について、少しお話ししておきます。皆さんが卒業して仕事を始めたとき、一流のものを見ることをいつも心掛けておくと役立つはずですが、仕事は選ぶものではありません。選べるのは趣味であって、仕事ではないのです。仕事というからには、選ぶものでなく、選ばれるもの、あるいは選んでもらえるようにするものです。仕事は選ばれるものだから、社会人として働くようになると、どのような仕事を任されるかは分かりません。もちろん、自分の希望する仕事を任せてもらえることもあり、そうなれば幸運ですが、まったく考えてもいなかった仕事を割り当てられることもあります。何をどうすればいいのか分からないと、困惑することもあるでしょう。そういうときにどうすればいいのか。答えはこうです。一流のものを探して、それを真似るようにする。これがコツです。

じつのところ、誰でも自然に一流のものを見て真似る方法はとっています。いちばん分かりやすい例はたぶん、スポーツでしょう。上達したい人はかならず一流のものを見ています。テニスがもっとうまくなりたいと考える人なら、ウィンブルドンの中継を見ているはずですが、たいいていの人にとってスポーツは趣味であって仕事ではありませんが、趣味ですらそうしている。仕事ならましてそうすべきです。

では、翻訳でこの方法をどう使うか、具体例をみて

いきましょう。以下で何人かの一流の翻訳家の作品をみていきます。いわゆるエンターテインメントの分野の翻訳家を中心に取りますが、その理由は簡単です。いまの日本で一流の翻訳家と呼べる人の数がいちばん多いのがこの分野なのです。たぶん、純文学やノンフィクション、社会科学、自然科学などの分野とくらべて、専門の翻訳家、つまり翻訳家以外に肩書をもたない人の数がかつても多く、したがって、競争がいちばん激しいのがこの分野だからでしょう。

各翻訳家の代表作と思われるものの冒頭部分を紹介していきます。なぜ冒頭部分なのかと思われるかもしれませんが、文章は本来、前後との関係があってはじめて成り立つものです。前があり、後ろがあってこそ理解できるものなのです。全文をみていくわけにはいかない場合、少なくとも前がない冒頭部分を見るのがいちばん良いと考えられます。

前置きはこの程度にして、まずは『不思議の国のアリス』でも紹介した矢川澄子の翻訳を見てみましょう。4ページ以下の資料の1と2をみてください。

矢川澄子は2002年に惜しくも亡くなっていますが、現代の日本を代表する翻訳家のひとりであることは確かだと思います。何よりも美しい日本語を書く翻訳家です。前回に紹介した『不思議の国のアリス』の例をみても、ここにあげた2つの例をみても、この点はあきらかでしょう。

資料2の『雪のひとひら』は原作がとうに絶版になっているのに、日本では矢川訳が売れつづけています。女の一生を童話風に描いていますから、時代を超えた魅力がある作品だと思いますが、日本で読みつがれているのは、何よりも訳文が美しいからだと思います。前回に矢川訳の特徴として、朗読に適した文章である点をあげましたが、『雪のひとひら』もまさにそういう文章になっています。

原文は平易な英語なので、たとえば高校で英語を学ぶときや、大人になって英語を再学習する際に、恰好の教材になるようにも思います。英語を学ぶときに訳文として示されるのが、ほとんどの場合、日本語とはとてもいえないような惨めな文章であるのは不幸なこ

とです。外国語を学ぶときにこそ、美しい日本語が必要なのだと思います。そういう意味で、矢川訳は英語の教材としても最適かもしれません。

矢川澄子は小説家としてもすぐれた作品をのこした人だから、翻訳が優れているのは当然だという意見もあります。しかし、有名な作家や名文家が翻訳では悲惨な文章になる例はたくさんあります。その方が多いといえるほどです。翻訳になると、美しい日本語を書けなくなり、あるいは論理的な日本語を書けなくなる場合が少なくないのです。おそらく、翻訳にはさまざまな約束ごとがあって、それに縛られるからでしょう。そして約束ごとというのは、大部分が英文和訳の約束ごとです。

矢川訳が素晴らしいのは、翻訳の約束ごとにはまったくとらわれず、自由に日本語を書いているからです。自由な訳で、語順も自由に選び、訳語も自由に選んでいます。かといっていわゆる豪傑訳ではありません。矢川澄子が自分の名前で翻訳と執筆をはじめたのは洪澤龍彦と離婚した後ですが、洪澤は自由というより奔放に訳したことで有名です。原文と照らし合わせながら読んだことはないの、確かなことはいえませんが、そういわれているのは事実です。これに対して矢川訳は、自由ではあっても、原文からかけ離れることはありません。原文に密着して訳しながら、心地よく朗読できる美しい日本語になっているのです。

おそらく、矢川澄子は翻訳にあたっていつも、朗読する読者を念頭においていたのでしょう。メルヘンの翻訳が主な仕事だったので、朗読する読者こそ本来の読者だったのでしょう。本来の読者に原著の素晴らしい姿を伝える姿勢がはっきりしていたから、翻訳の約束ごとにはとらわれず、自由に日本語を書くことができたのだと思います。

つぎに、やはり現代の日本を代表する翻訳家のひとり、村上博基の訳（資料3と4）をみてみましょう。

前回、サイデンステッカーが『山の音』の翻訳で、「冷静に」の1語を *calmly and deliberately* と2語で訳していることを紹介しました。英語では形容詞や副詞の同義語を複数並べることが多く、1語だけで訳すと、落ちつかない文章、間の抜けた文章になりかねないからだとみられます。この点を考えると、資料3の『女王陛下のユリシーズ号』の冒頭にある *Slowly, deliberately* は、1語で訳してもよかったように思えるかもしれません。しかし村上博基はそうせず、「おも

むろに、もったいぶって」と訳しています。この点に、村上訳の特徴がよくあらわれていると思えます。

日本では、前述のように翻訳にはさまざまな約束ごとがあります。前回にも触れたように、この点でいちばん大きな制約を受けているのは、おそらく英語の原著を和訳している翻訳家です。たとえば原文の2語を1語で訳したりすると、訳抜けだと非難されかねません。英文和訳の原則は知っているが、英語の性格も日本語の性格もおそらくはじっくり考えたことがない人に、鬼の首でもとったように「誤訳」だと指摘されかねないのです。そういう読者がいても、笑っていればいいともいえますが、読者のそういう要求を感じて、編集者が同じことを要求する 경우가少なくありません。編集者は翻訳家にとって直接の発注者ですから、編集者の要求をはねつけるのは、そう簡単ではありません。だから原文の2語は2語で訳す。それだけでなく、原文にできるかぎり忠実に訳して、原著と突き合わせて読む読者も満足するようにする。そしてもちろん、訳書だけを読む本来の読者が満足してくれるように訳す。村上博基の翻訳を読むと、訳者がそう意識していたかどうかは分からないが、そういう訳文になっていると思います。いってみれば綱渡りのようなことなのですが、それをやすやすとやってみせるのが、村上博基なのです。

じつは、翻訳の約束ごとは、原文の2語は2語で訳すということにとどまりません。それぞれの語で使える訳語も決まっています。たとえば *slowly* なら「遅く」か「ゆっくり」が正解、*deliberately* なら「慎重に」か「ゆっくり」が正解です。この正解をみても、この2語が同義語の並列であることが分かりますが、それはともかく、訳語まで制約されては、訳書だけを読む本来の読者が満足する訳文は書けません。そこで、村上博基は訳語の部分で思い切って飛躍します。そうしてでてきたのが「おもむろに、もったいぶって」という訳文なのです。この訳語なら、たしかに辞書にはでていないとしても、誤訳だといわれる気遣いはないし、しかも、訳書だけを読む本来の読者が満足してくれるはずで

同様のことが資料4の『スマイリーと仲間たち』の冒頭部分にもいえます。たとえば、*seemingly, by tradition, bus-loads of* といった言葉が1語ずつ丁寧に訳されています。そして、「一見」「例のごとく」「バスでくりこむ」という文脈にぴったりの言葉、そして英和の辞書にはない言葉を使っています。

英語の原著を和訳している翻訳家というならば、がんにがらめの制約を受けていますが、村上博基はこの制約を言葉に対する鋭い感性ですり抜けています。原文の語の意味を読み取る感性、正解とされている訳語を無視してびったりの語を見つけ出す感性、そしてもちろん語彙の豊富さが村上博基の特徴でしょう。

つぎに土屋正雄の訳（資料 5 と 6）をみてみましょう。

土屋正雄は村上博基とは違って、翻訳の約束ごとや制約がないかのごとく、自由に訳しています。翻訳のスタイルとしてはサイデンステッカーのものにかなり近いといえるでしょう。原著者が書いた内容を日本語で伝えること、これだけをひたすら追求しており、その際に、おそらくは翻訳者という立場からではなく、原著者になりきって小説を日本語で書く姿勢をとっているように思えます。

この立場から、たとえば資料 5 の『日の名残り』の冒頭部分でそうしているように、原文の 1 パラグラフを 2 段落に分けることもあります。これはたいていの翻訳家にとって禁忌ですし、禁忌を犯して段落を増やすと、訳文が読みにくくなることも少なくないのですが、土屋正雄の訳では、段落分けがごく自然になっています。おそらくは原著者になりきっているからこそできることなのでしょう。

また、英文和訳の原則では、後ろから前に訳すように決められていることが多く、1 つのセンテンスだけを切り離して訳す場合には、たしかにその方が素直な日本語になると思える場合も少なくないのですが、土屋正雄は、正解とされる訳し方にはとらわれず、正解とされる訳語にもとらわれず、じつに自由に訳しています。『日の名残り』の冒頭部分で、when ではじまる節がどう訳されているかに注目してください。

つぎに上田公子の翻訳（資料 7 と 8）をみてみましょう。数年前に引退を宣言して、いまは悠々自適の生活を送っているそうですが、復帰してほしいと考えている読者は少なくないと思います。

上田公子の翻訳も、日本語の小説として完成度の高い文章を書く姿勢が特徴になっています。台詞の訳が素晴らしい点も特徴です。たぶん、演劇をやっている人なら気持ち良く読める台詞なのではないでしょうか。基本的には原文に忠実な訳だし、とくに原文の流れに忠実な訳ですが（つまり、原文通りに前から後ろへと

訳していく訳ですが）、ときには思い切った飛躍もしています。資料 8 の『将軍の娘』で No trespassing を「人食い座」と訳しているのに注目してください。

このように思い切って飛躍しながら、破綻していないのは、訳者が原著者になりきって小説を書いているからでしょう。その点で、上田公子は土屋正雄に似ているともいえます。

最後にもうひとつ、芝山幹郎の訳（資料 9）を見てみましょう。原著者のスティーブン・キングは作品の数が極端に多いうえ、それぞれがきわめて長いので、2 人や 3 人の翻訳家ではとても訳しきれません。これまでに 20 人を超える翻訳家が訳していますが、そのなかで翻訳の質の高さが群れを抜いているのが芝山訳の『ニードフル・シングズ』でしょう。

この翻訳の特徴は原文の内容だけでなく、原文の文体を見事に活かしている点にあります。ラリった原文をラリった日本語で訳しているのです。

たぶん、いちばん注目したいのは語尾です。翻訳には約束ごとや制約がたくさんありますが、語尾についてはほとんど何の制約もないといえます。日本語では表現力の点でも、小説ではあまり問題になることはありませんが論理性の点でも、語尾がきわめて重要な役割を果たしています。たとえば、以下を比較してください。

- ・ 初めてじゃないね
- ・ 初めてじゃないさ
- ・ 初めてじゃない
- ・ 初めてではない
- ・ 初めてではないのです
- ・ 初めてではないのだ

これぐらいにしておきましょう。たぶん、数十通りならすぐに思いつくはずですが、100 通り以上考えつくこともあるでしょう。このように語尾を変えていくと、もちろん、意味が微妙に変わります。表面的な意味は同じですが、裏の意味、含意が微妙に違ってくるのです。日本語の語尾がいかに豊かさを考えていくと、日本語の豊かさ、美しさ、表現力、論理性が実感できるかもしれません。そして、日本語の豊かさ、美しさ、表現力、倫理性を支えているともいえる語尾については、翻訳にあたって何の制約も約束ごともないといえるのです。

翻訳の約束ごとや制約は基本的に英文和訳で公式や正解とされているものです。英語の学習と研究のなか

で形作られてきたものです。英語の表現力を支えているのはたぶん語彙であり、語尾にあたるものはないともいえるので、英語の学習者や研究者にとって盲点だったのでしょうか。だから、英和辞典をみればすぐに実感できるように、英語の膨大な語彙のひとつずつに訳語を割り当てることには熱心に取り組んできましたが、訳文に使う語尾には、ほとんど関心が払われてきませんでした。芝山幹郎はいわば、この盲点をうまく利用して、翻訳の約束ごとや制約をうまく突破しているといえます。

以上のように一流の翻訳家の訳文をみていくと、いくつかの基本的な点を確認できるはずで

第1は、翻訳は英文和訳とは違うという点です。英文和訳は自分の英語力を教師に、あるいは採点者に示すことが目的です。教育と学習を効率化するために、そしてもうひとつ、採点を効率的に行えるようにするために、たくさんの公式や正解が決められています。翻訳は原文・原著の内容を読者に伝えることが目的です。この目的を達成する方法は本来なら訳者に任せられています。公式や正解はなく、自由に訳すことができます。

ただし、とくに英語で書かれた原著・原文を日本語に訳す場合には、訳者はもともと英文和訳のために作られた約束ごとや制約に、かなりの程度しばられています。この制約をどう突破するか、あるいはすり抜けるかが、翻訳家の腕の見せ所になります。

第2は、今回取り上げた小説の翻訳でいうなら、訳文が日本語の小説として読めるものになっていなければ

ならないという点です。一流の翻訳家が訳した小説はみな、そうなっています。言い換えれば、翻訳なのだからという言い訳は許されないのです。翻訳だから、日本語の文章としては少々おかしくなっているても仕方がないとか、少々読みづらくても仕方がないとか、文章が美しくなくても仕方がないとかの言い訳は許されません。読者は翻訳物を読むか日本人の書き手が書いたものを読むかの選択権をもっています。原著で読むという選択肢もあり、最近ではこの方法を選べる人が増えています。翻訳物を読まなければいけないという理由はないのです。

この点を考えると、翻訳では「訳すのではなく書く」のが正解だといえるはずで

今回紹介した一流の翻訳家はすべて小説の分野の人たちですが、翻訳の対象はもちろん、小説だけではありません。ノンフィクションもあれば、社会科学や人文科学、自然科学もあり、実務の分野でも大量の文書が翻訳されています。しかし、どの分野のものでも、翻訳とはどういうものか、どうすれば優れた翻訳ができるか、翻訳の面白さはどこにあるのかを考える際には、今回紹介したのと同じ方法を使うことができます。一流のものを読む、これが最善の方法です。二流、三流のものを読むと、時間を無駄にするだけでなく、知らず知らずのうちに真似ることになって、害になることすらあります。だから、一流のものを読むように心掛けるべきです。それが自分の力を伸ばす最善の方法であり、同時に人生を豊かにする方法にもなります。

翻訳講義資料

- 1 ひとつだけたしかなのは、白い子猫〔こねこ〕はなんにも関係ないってことだ。なにもかも黒い子猫のせいだったんだよ。だって白いほうはもう十五分もまえから親猫に顔をあらってもらってたんだから（またずいぶん辛抱づよいことだ）、おいたの片棒かつげるわけがないだろう。
- 2 雪のひとひらは、ある寒い冬の日、地上を何マイルも離れたはるかな空の高みで生まれました。灰色の雲が、凍〔い〕てつくような風に追われて陸地の上を流れていました。その雲の只中〔ただなか〕で、このむすめのいのちは芽生えたのでした。
- 3 おもむろに、もったいぶって、スターは煙草をもみ消した。ヴァレリー艦長はその仕種に、なんとなく決断と最終的態度があらわれているように思った。彼はつぎに

One thing was certain, that the white kitten had had nothing to do with it: - it was the black kitten's fault entirely. For the white kitten had been having its face washed by the old cat for the last quarter of an hour (and bearing it pretty well, considering); so you see that it couldn't have had any hand in the mischief.

The Snowflake was born on a cold, winter's day in the sky, many miles above the earth.

Her birth took place in the heart of a grey cloud that swept over the land driven by icy winds.

Slowly, deliberately, Starr crushed out the butt of his cigarette. The gesture, Captain Vallery thought, held a curious air of decision and finality. He knew what was

なにがくるかを知って、すると一瞬、ひりりと刺すようなにがい敗北感が、このところ前頭部から消えぬ鈍痛のあいだをつらぬいた。が、それもほんの一瞬だった。彼は疲れていた。意に介するにはあまりに疲れていた。

4 一見関係のないふたつの出来事が、ミスター・ジョージ・スマイリーを、そのあやぶまれた引退生活からよびもどすことになった。最初の出来事の背景はパリ、季節はうだるような八月、例のごとくパリジャンが、灼けつく日ざしと、バスでくりこむ団体観光客に、街を明け渡すときであった。

5 ここ数日来、頭から離れなかった旅行の件が、どうやら、しだいに現実のものとなっていくようです。ファラディ様のあの立派なフォードをお借りして、私が一人旅をする - - もし実現すれば、私はイギリスで最も素晴らしい田園風景の中を西へ向かい、ひょっとしたら五、六日も、ダーリントン・ハウスを離れることになるかもしれません。

この旅行の話は、もともとファラディ様のまことにご親切な提案から始まったことです。二週間ほど前、私が読書室で肖像画のほこりを払っていたときのことでした。脚立にのぼり、ちょうどウェザビー子爵の肖像画に向かっておりますと、ファラディ様が棚に戻す書物を数冊、腕に抱えて入ってこられました。私を認め、ちょうどよかったという表情で、「やっと決めたよ。八月九月は、五週間ほどアメリカに帰ってくることにした」と告げられたあと、書物をテーブルに置き、長椅子に腰をおろし、脚をのばして私を見上げながら、こう言われたのです。

6 父と母はニューヨークで出会って結婚し、私を生んだ。そのままニューヨークにとどまればよかったのに、アイルランドに帰った。私が四歳のとき。弟マキラは三歳、双子の弟オリバーとユージーンはようやく一歳、妹マーガレットはもう死んで、いなくなっていた。

7 「もっと悲しまなきゃいかんのだが」とレイモンド・ホーガンが言う。

最初、わたしは、彼がこれから述べる予定の弔辞のことを言っているのかと思った。レイモンドは、弔辞のメモにまたしても目を通して、そのカード二枚を、紺サージのスーツのポケットに戻しているところだ。だが、その表情を目にすると、いまの言葉は彼の個人的な感情のことだとわかる。郡の公用車であるこのビュイックがサウスエンドに近づくにつれ、次第に密になる車の流れを、レイモンドはうしろの座席の窓ごしにじっとみつめている。その目が一種の瞑想的な色をおびているのだ。それを眺めるうち、わたしは突然、いまの彼のポーズこそ、今年の選挙運動の写真として効果的だったのに、と思う。厳粛さと勇気と一抹の悲しみをあらわすぼつりした顔。そこには、ときとして悲しげなこの大都市のストイックな雰囲気、たとえばいま通っている地区の、

coming next, and, just for a moment, the sharp bitterness of defeat cut through that dull ache that never left his forehead nowadays. But it was only for a moment -- he was too tired really, far too tired to care.

Two seemingly unconnected events heralded the summons of Mr. George Smiley from his dubious retirement. The first had for its background Paris, and for a season the boiling month of August, when Parisians by tradition abandon their city to the scolding sunshine and the bus-loads of packaged tourists.

It seems increasingly likely that I really will undertake the expedition that has been preoccupying my imagination now for some days. An expedition, I should say, which I will undertake alone, in the comfort of Mr Farraday's Ford; an expedition which, as I foresee it, will take me through much of the finest countryside of England to the West Country, and may keep me away from Darlington Hall for as much as five or six days. The idea of such a journey came about, I should point out, from a most kind suggestion put to me by Mr Farraday himself one afternoon almost a fortnight ago, when I had been dusting the portraits in the library. In fact, as I recall, I was up on the step-ladder dusting the portrait of Viscount Wetherby when my employer had entered carrying a few volumes which he presumably wished returned to the shelves. On seeing my person, he took the opportunity to inform me that he had just that moment finalized plans to return to the United States for a period of five weeks between August and September. Having made this announcement, my employer put his volumes down on a table, seated himself on the chaise-longue, and stretched out his legs. It was then, gazing at me, that he said:

My father and mother should have stayed in New York where they met and married and where I was born. Instead, they retired to Ireland when I was four, my brother, Malachy, three, the twins, Oliver and Eugene, barely one, and my sister, Margaret, dead and gone.

'I should feel sorrier,' Raymond Horgan says.

I wonder at first if he is talking about the eulogy he is going to deliver. He has just looked over his notes again and is returning two index cards to the breast pocket of his blue serge suit. But when I catch his expression I recognize that his remark was personal. From the rear seat of the county's Buick, he stares through the auto window toward the traffic thickening as we approach the South End. His look has taken on a meditative cast. As I watch him, it strikes me that this pose would have been effective as The Picture for this year's campaign: Raymond's thick features fixed in an aspect of solemnity, courage, and a trace of sorrow. He shows something of the stoic air of this sometimes sad metropolis, like the soiled bricks and tarpapers roofs of

タール紙張りの屋上をもつすすけた煉瓦づくりの建物にも似た何かを感じられる。

- 8 「この席、あいてますか？」わたしは、ラウンジにひとりで坐っている魅力的な若い女性にたずねた。
娘は読んでいた新聞から顔をあげたが答えない。
わたしはカクテルテーブルをはさんで彼女の向かいに坐ると、手にしたビールのグラスをテーブルに置いた。娘はまた新聞にもどって自分の飲み物をすすっている。バーボンのコーラ割りだ。わたしは訊いた。
「ここへはよく？」
「あっちへ行って」
「きみの星座は？」
「人食い座」
「どこかで会わなかったかな？」
「いいえ」
「会ったとも。ブリュッセルのNATO本部。あそこのカクテルパーティで」
「かもしれない」彼女はやっと認めた。「あなたは酔っぱらってパンチボウルのなかに吐いたわ」

- 9 あんた、初めてじゃないね
そうさ、初めてじゃないよ。まちがいない。前にもここへきたことがあるだろ。その顔、ちゃんとおぼえてるぜ。
こっちへきな。握手ぐらいさせてくれよ。話があるんだ。あんたのこと、顔が見える前から気がついてた。歩き方でわかったのさ。でも、いい時季を選んだね。キャッスルロックへ帰ってくるには申し分ない日じゃないか。な、最高だろ？ 狩猟はじきに解禁になる。森のなかの馬鹿者どもは、動くものさえ見れば、そいつがオレンジ色のチョッキを着てないかぎり、おかまいなしに鉄砲をぶっぱなす。そのあとは雪とみぞれの季節だけれど、それはだいたい先のことだ。いまは十月。ロックの住民はこう思ってる。 - - 十月という名の女には好きなだけこの町にいさせてやろうぜ、って。

出典

- 1 矢川澄子訳ルイス・キャロル著『鏡の国のアリス』（新潮文庫）
Lewis Carroll, *Through the Looking-Glass*, Puffin Classics
- 2 矢川澄子訳ポール・ギャリコ著『雪のひとひら』（新潮文庫）
Paul Gallico, *Snowflake*, Doubleday & Company
- 3 村上博基訳アリスティア・マククリーン著『女王陛下のユリシーズ号』（ハヤカワ文庫）
Alistair MacLean, *HMS Ulysses*, Compass Press
- 4 村上博基訳ジョン・ル・カレ著『スマイリーと仲間たち』（ハヤカワ文庫）
John Le Carre, *Smiley's People*, Bantam Books
- 5 土屋政雄訳カズオ・イシグロ著『日の名残り』（中公文庫）
Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day*, Vintage International
- 6 土屋政雄訳フランク・マコート著『アンジェラの灰』（新潮社）
Frank McCourt, *Angela's Ashes*, Scribner
- 7 上田公子訳スコット・トゥロー著『推定無罪』（文春文庫）
Scott Turow, *Presumed Innocent*, Penguin Books
- 8 上田公子訳ネルソン・デミル著『将軍の娘』（文藝春秋社）
Nelson DeMille, *The General's Daughter*, HarperCollins Publishers
- 9 芝山幹郎訳スティーブン・キング訳『ニードフル・シングス』（文藝春秋社）
Stephen King, *Needful Things*, Signet Books

this part of town.

'Is this seat taken?' I asked the attractive young woman sitting by herself in the lounge.

She looked up from her newspaper but didn't reply.

I sat opposite her at the cocktail table and put down my beer. She went back to her paper and sipped on her drink, a bourbon and Coke. I inquired, 'Come here often?'

'Go away.'

'What's your sign?'

'No trespassing.'

'Don't I know you from somewhere?'

'No.'

'Yes. NATO Headquarters in Brussels. We met at a cocktail party.'

'Perhaps you're right,' she conceded. 'You got drunk and threw up in the punch bowl!'

YOU'VE BEEN HERE BEFORE.

Sure you have. I never forget a face.

Come on over here, let me shake your hand! Tell you somethin: I recognized you by the way you walk even before I saw your face good. You couldn't have picked a better day to come back to Castle Rock. Ain't she a corker? Hunting season will be starting up soon, fools out in the woods bangin away at anything that moves and don't were blaze orange, and then comes the snow and sleet, but all that's for later. Right now it's October, and in The Rock we let October stay just as long as she wants to.

「時の娘」の母

あけましておめでとうございます。「私的ミステリ通信」は、2004年も細々と続けさせていただくつもりであります。本年もどうぞよろしく願いいたします。

さて、「歴史的事実」という言葉があります。しかし、現在生きている人間が誰もその目で見たはずのないことは、実際は「伝聞」の形でしか知ることができません。当時の文書が残っていたとしても、書き手が嘘をついていないとは誰が保証できるのでしょうか？ましてや政治的大事件の場合、どちらサイドの人間が書いたのかを検証することはとても大切になります。そしてどんなに検証を重ねたとしても、100パーセント確実だとは言いきることは難しいのです。

こういう「歴史を疑う」姿勢というのは、今でこそさほど新鮮ではありませんが、今から五十年以上前の1950年代の初めに歴史の固定概念をひっくり返してみせた一冊のミステリがあります。ジョセフィン・テイの歴史ミステリ『時の娘』（小泉喜美子訳・ハヤカワミステリ文庫）です。

『時の娘』は薔薇戦争時代の悪役、リチャード世の「汚名をそそぐ」ミステリです。この本はあまりにも有名で、テイ＝『時の娘』というイメージがありますが、実はテイの魅力はこの一作に限られたものではありません。今回はその多彩な魅力に富んだテイの作品を紹介してみたいと思います。

[ジョセフィン・テイ \(Josephine Tey\)](#) は本名をエリザベス・マッキントッシュといいます。劇作家でもあり、ゴードン・ダヴィオットという名前でも作品を発表しています。名作『時の娘』を発表した翌年の1952年、まさにこれからという時に56歳でなくなっており、その作品の完成度や多彩さを考えると、本当に惜しいことでした。Scribner社から出ているテイの作品のペーパーバック版には、冒頭に推理作家であり、ミステリ評論家でもあるロバート・バーナードの序文がついていますが、その中でバーナードも、もしテイがその後も生きていたら、どんな作品を残していただろうと考えると本当に惜しいとしかいいようがないと書いています。

テイのミステリは8作あり、原書は現在どれもScribner社のペーパーバック版で入手することができます。邦訳は『時の娘』はもちろん入手可能ですし、近年『ロウソクのために一シリングを』（直良和美訳・ハヤカワポケットミステリ）、『魔性の馬』（堀田碧訳・小学館）と未訳だった作品が相次いで翻訳されるなど朗報が続いています。

リチャード世といえば、シェイクスピアの歴史劇で有名です。兄のエドワード世の亡き後、自らが王位につくために、兄の息子である二人の王子、つまり自分の甥にあたる幼い王子たちを、ロンドン塔に幽閉した挙句に殺させたといわれている人物です。『時の娘』は、イギリスの「国民的悪役」でもあるこの王は、果たして本当に王子殺害の黒幕なのか、という謎を提起し、解明しているのです。

この謎に挑むのはロンドン警視庁の敏腕警部アラン・グラントです。犯人を追跡中にマンホールに落ちて足を骨折するという、かなり敏腕ならざる状況で入院する羽目に陥ったグラント警部は、友人である女優マータ・ハラードのすすめで、退屈しのぎに歴史上の人物たちの肖像画を眺めていました。ベッドの上でその中の一枚、リチャード世の顔を眺めていたグラントは、この絵に描かれた人物は犯罪者には見えないと思いました。そこで現職の警察官ならではの手法、つまり出来事を「殺人事件」として扱うことによって、資料の中から真実をつきとめていきます。グラントが導き出した推論は、鮮やかであると同時にショッキングで、少し悲しいものでした。

この『時の娘』は歴史ミステリの草分け的存在であり、また発表されてから五十年以上たった今でも、このジャンルの最高峰であると言えるでしょう。日本ではこの作品に触発され、高木昭光が『成吉思汗の秘密』（角川文庫ほか）を書いたことが有名ですし、その後、現在に至るまで、歴史上の謎を現代の登場人物が探るミステリがたくさん書き継がれています。

同時に『時の娘』は安楽椅子探偵（この場合はベッド探偵ですが）ものとしても重要な作品です。もちろんパロネス・オルツィの『隅の老人』などのように、実際には現場にいかずに推理をする探偵はテイ以前にもいましたが、いつもイギリス全土をまたにかけ、縦横無尽に活躍しているグラント警部が、入院中という

特殊な時間の中で、歴史上の謎を解き明かしたこの作品は、とても鮮烈な印象を残しています。

日本の読者が幸せなのは、この『時の娘』がとてもよい翻訳にめぐまれていることだと思います。テイ自身、とても筆力があり、ベッド探偵でしかも扱うものが歴史的な事柄という、冗漫になりがちな設定のこの作品でも、読者を飽きさせずに引っ張っていているのはさすがです。そして小泉訳はさらにその味をよく引き立てていると思います。小泉喜美子は自身も推理作家であり、『ダイナマイト円舞曲』（光文社 私はこの本が大好きでした！）、『弁護側の証人』（集英社）などを書いています。クレイグ・ライスなどをはじめ、多くの海外ミステリの翻訳もしています。私事で恐縮ですが、ライス『スイートホーム殺人事件』、P. D. ジェイムス『女には向かない職業』、そしてこの『時の娘』。ミステリを読み始めた頃の私のお気に入りであり、またその後のミステリ観に多大な影響を与えてくれたこの三冊は、気づけばみな小泉喜美子訳でした。何よりも読者を楽しませるということを知っている訳者だったような気がします。

テイの歴史ミステリは『時の娘』の他にもう一冊あります。『フランチャイズ事件』（大山功訳・ハヤカワポケットミステリ）です。第2回で紹介したリリアン・デ・ラ・トーレが『消えたエリザベス』で扱ったのと同じ、18世紀に実際に起こった少女誘拐事件を書いています。デ・ラ・トーレと違ってテイは、この事件をそっくりそのまま20世紀に移し変え、グラント警部に捜査をさせました。そのおかげでより臨場感が出ていると思います。『時の娘』よりも上に推している人も多いぐらいです。残念ながら邦訳は現在、新刊では手に入りません。復刊あるいは新訳が望まれます。

さて、グラント警部とはいったいどんな人物なのでしょう。テイはミステリを8冊書いていて、グラントはそのうちの6冊に登場するシリーズ探偵です。ここでは第一作 The Man in the Queue と共にグラント警部を紹介してみましよう。

The Man in the Queue はロンドンの劇場の前で始まります。大ヒットミュージカルの当日券のための行列の中で、一人の男が倒れます。力なく横たわったその男は息絶えていて、背中にはイタリア風の短いナイフが突き刺さっていました。グラント警部は捜査を開始

します。男のポケットには拳銃が入っていて、不思議なことに服のラベルなどがはがされている上に、身元のわかるようなものを一切身につけていませんでした。行列の人々は誰も犯人を見ていません。また凶器のナイフはとても特徴のある品だったのですが、ミュージカルの主演女優（グラント警部は顔見知りです！）がふと興味を示した以外、あとは誰もが見たことがないと言います。やがて警察に5ポンド入りの封筒が送られてきて、添えられたメモには「このお金で彼を葬ってください」と書いてありました。このメモからグラント警部は捜査を進め、被害者がソレルという男であり、手紙を送ってきたのは同居人のラモントという男だということをつきとめます。逃亡したラモントを追い、グラント警部はスコットランドへと向かうのですが……。

登場の時からグラントは、ハンサムで上品で生まれもよい紳士であり、上司にも部下にも信頼されている敏腕警部。おしゃれで女優とも知り合いの警察官としてはかなり華やかな雰囲気を持つ男性です。優しい人柄をしのばせる部分も随所にあり、スコットランドの警察署長の娘エリカ（風変わりな少女なのですが、事件解決に大変な貢献をします）にも一目で気に入られてしまうというモテモテぶりです。

ここまでは黄金期のミステリの探偵役としてはあまり珍しくないキャラクターですが、グラントは素人探偵ではなくプロの警察官ですので、逮捕の前に必ず、「これからあなたの発言はあなたの不利に使われることもある……」という決まり文句を読み上げる場面がちゃんと描かれているのが新鮮です。

また、私は最近気づいてしまったのですが、グラント警部は作中で何度もその優秀さやスマートさを讃えられているにもかかわらず、実はかなりの頻度でドジをふんでいます。この The Man in the Queue では、その優しさが災いしてミスを行っています。容疑者を女性の前では逮捕しないという配慮をしたために、顔にコショウをふりかけられ、目が見えなくなったすきに逃げられたのです（結末にかかわることなので詳しくは書けませんが、実はもっと大きなミスも犯しています）。また『ロウソクのためにーシリングを』では容疑者が物入れにたてこもっていると思っていたら、実はその物入れの奥には階段があって、容疑者はとっくにそこから逃げていました。それに『時の娘』の冒頭では、犯人追跡中にマンホールに落ちたと書かれているではありませんか！

グラント警部の推理はいつもかなり試行錯誤を繰り返しています。The Man in the Queue はグラント警部の独白めいた部分が多いだけに、その印象が強く残る気がします。読んでいて私はコリン・デクスターの

モース警部ものや、ウィリアム・L・デアンドリアの『ホッグ連続殺人事件』（真崎義博訳・ハヤカワミステリ文庫）を思い出しました。「華麗なる推理の迷宮」というのは、たしかモース警部もののもステリにつけられたキャッチフレーズだったと思いますが、なかなかどうして「迷宮」ぶりではグラント警部も負けていないと思います。

しかし、試行錯誤の末に、結局グラントが事件を解決するのは、自説や自分のプライドに固執しない素直さのせいだと思います。The Man in the Queueでは、ある人物がグラントの推理をひっくり返しますが、彼はそれを恨むどころか自分の過ちを正し、本当の失敗を防いでくれたと感謝します。また結末近くで、事件の鍵を握る女性が突然現れた時も、グラント警部の上司は耳を貸そうとしませんが、グラント警部は彼女の言葉をまじめに聞き、真実を知ることになったのです。

テイにはノン・シリーズのステリも2作あります。Miss Pym Disposes と『魔性の馬』です。

まず Miss Pym Disposes は、ある全寮制の女子体育学校が舞台になっているステリです。ふとした思いつきで書いた心理学の本がベストセラーになり、一躍有名人になってしまったミス・ピムは、女学校時代の同級生が校長を務める体育大学から依頼を受け、講演のためにその学校を訪れます。最初は一泊の滞在のつもりでしたが、ロンドンでの暮らしに飽きていたミス・ピムは、請われるままに卒業試験と発表会が終わるまで、学生たちと過ごすことになります。育ち盛り、食べ盛りで、刺激に飢え、好奇心でいっぱいの子生たちと楽しく過ごすミス・ピムでしたが、教師に頼まれて試験監督を務めた時に、ローズという生徒がカンニングをしていたのではないかという疑惑を持ちます。それを校長に告げるべきか否か。ちょうど就職斡旋の時期でもあり、告げれば間違いなくその生徒の将来に影響するでしょう。正義感と、その生徒を思いやる心の狭間で思い悩んだミス・ピムは、結局その件を心の内にしまっておきます。しかし校長が、イギリスの名門校の体育教師の職に、誰もが優秀だと思う生徒メアリエをさしおいて、あのローズを推薦したことを聞き、ミス・ピムは校長に事実を告げに行きます。しかし校長はミス・ピムの言葉を信じようとはしません。やがてローズが不可解な事故に遭い……。

ステリでありながら、殺人は全体の四分の三ほど過ぎるまで起こりません。そこまではカンニングや、校長がなぜローズを推薦するのかという謎はあるものの、体育学校での生活を中心に描かれています。そしてその部分が文句なく面白いのです。細部がとてもし

きいきと描かれ、教師や生徒など個性的な人物たちが多数登場します。また、今読んでも全く古さを感じません。テイの筆力のすばらしさの賜物だと思います。

事件の真相の方は、本当に最後の最後でどんでん返しがあります。Miss Pym Disposes、つまり「ミス・ピム裁きを下す」という題名はとても皮肉で、前半のどかな雰囲気とは裏腹に、ラストでミス・ピムが知る真実は意外で、かなり冷酷です。

『魔性の馬』の方は、大きな牧場を持つアシュビー家が舞台です。アシュビー家の長男パトリックは八年前、十三歳の時に、遺書のような手紙を残して失踪しています。家督はパトリックの双子の弟サイモンがまもなく相続することになっていました。しかしそこに、アシュビー家の親類の男にそそのかされ、サイモンと瓜二つのブラットという男性が、パトリックになりまして、入り込むことになるのです。妹や伯母はブラットをパトリックとして暖かく迎えてくれたのですが、サイモンだけは不可解なほど敵意を見せ、パトリック失踪の秘密を何か知っているようでした……。

偽者であるブラットの正体がばれないのかというスリルと、8年前、パトリックに何が起こったのかという謎、そしてサイモンの対決の息詰まるサスペンスと併行して、牧場の風景、家庭内のいきいきとした会話、伯母や無邪気な妹たちとの交情が、孤児であるブラットの心を癒していくさまがしっかりと描かれ、読み応えがあります。

テイは固定概念を覆すことが好きな作家だったのだと思います。リチャード 世は悪人だというイメージを覆し、平和そのものに見える女学校の中にひそむ悪を暴き、グラントの活躍を通して何度も何度も読者をあっと言わせました。ラスト 10 ページ足らずのところどんでん返しが待っていることも珍しくないで、テイのステリは本当に最後まで気の抜けません。

「真理は時の娘」というのは『時の娘』の冒頭に掲げられていることわざですが、死後五十年以上経った今も、その作品が色あせず、世界中で高い評価を得ているということが、テイの作品の時を越えた真価を証明していると言えるでしょう。

ジョセフィン・テイの作品リストを[翻訳通信のサイト](#)に掲載しました。URL は以下の通りです。

<http://homepage3.nifty.com/hon-yaku/tsushin/my/dt/tey.html>

おろそかにされがちな語法 その

意識せずとも大抵の場合はつつがなく訳せる。だが、きちんと理解しておかないと訳のあいまいさやずれ、はては誤訳をきたしかねない文法のエッセンスを、思いつくまま並べる。

不可算名詞の可算名詞化

不可算名詞が具体化されて可算名詞になる。訳を「...な人・事・物・状態」とすると分かりやすい。

例：To hold otherwise is to hold that wisdom can be got by combining many ignorances.

あるセミナーで「そうでないというなら無知な人間を寄せ集めれば英知あふれる意見が得られるということになってしまう」という訳をつけたら、何人かの受講者から「原文では多くの無知とはいっているが、無知な人間とはいっていないでないか」とのクレームがついた。かなりできる人たちだったので、逆にこちらが驚いた。

形をイメージできない不可算名詞 ignorance (総称用法で「無知なるもの」) が-s がついて可算化されたのだから、具体的にイメージできるものを文脈から (この前後では人間が適当) 読み取らねばならない。

She is a wonderful beauty.

人：美 美しい人 美人
(彼女はとても美人だ)

Its characteristics have been defined; its development has been noted; influences upon it have been traced.

事：影響 影響した事から
(その特質が明らかにされ、発展過程が記され、影響を及ぼしたものが論証されてきた)

It is a protest against virtues that sail among the shallows of caution and timidity and never venture among the perils of high seas.

状態 / 物：抗議 抗議の状態 抗議の行動 / 美德
美德をあらわす物 (個々の) 美点
(用心深くびくびくと浅瀬を動き回り、けっして危険な海外へ船出しないいわゆる美德に対する異議申し立てといえる)

of の意味

私は二つの名詞を結ぶ of がでてくると、いつも身構えて、次のどの働きなのか考える。結局は「...の」

と訳をつけることが多いのだが、働きを知っているといないでは訳文全体の説得性が違ってくると思う。

所有：the courage of the hero：...の持つ (英雄にそなわる 勇気)

主格：the absence of his father：...が (父親がいないこと)

目的格：the education of his son：...を (息子を教育すること)

同格：the city of Tokyo：...という (東京という町)

関連：a book of adventure：...に関する (冒険についての本)

いずれも「...の」で処理できるが、そのままだと意味が不鮮明になることがある。

We should know the map of the heavens as we know the map of England.

関連：空についての地図 / イングランドについての地図
(自国の地理同様に星座の位置についても知っていてよいはずだ)

It is salutary to realize the fundamental isolation of the individual mind.

主格：個人の心が根本的に孤立しているということ
(個人の意識が根本的に独立したものであると理解するのは有益である)

Every man has to-day the power of laying some foundation for doing good, if not of doing it.

同格：据えるという力 / 実行するという力
* of のあと動名詞がくると前の名詞と同格に働く
(実際できるかどうかは別としても、今日では誰もが慈善へのとっかかりとなりうる位の資力は持っている)

But here it is worth noticing a minor English trait which is extremely well marked though not often commented on, and that is a love of flowers.

目的格：花を愛すること
(だがここで、あまり話題にはならないがよく目につくイギリス人のちょっとした特質について触れてみたい。それは、花を賞でることである)

All genius, whether religious or artistic, is a kind of excess.

所有格：過激なるものの一種
(宗教家であれ芸術家であれ、天才というものはすべてあ

る意味においての過激な人物なのである)

(動詞+)副詞+前置詞(+名詞)

副詞が大状況、前置詞が小状況を示す。

または副詞でおおまかな位置、前置詞で具体的な場所を示す。

I do hope that we will not find a day in the United States when all of us are spectators expect for a few who are out on the field.

外にいる 具体的にはフィールドの上

*I は元・アメリカ合衆国大統領ケネディ

(この合衆国において、競技者以外の国民がみな観戦者となってしまう日の来たりませんことを切に望みます)

And now he was bending forward over the machine.

前に屈む 具体的には機械の上

(そしてこんどは機械をうえから覗き込んだ)

That was the best period of them all—when he could look down at his feet.

下を見た (could は感覚動詞における現在進行形の代用「...していた」) 足元を

(みんなあの頃が一番よかった そう思って彼は足元に目をやった)

自動詞と他動詞

自動詞は目的語をとらない。他動詞は目的語をとる。

例:

自: Be not afraid, only believe. (恐れず、ただ信じなさい)

他: We should believe the things. (我々はそれを信じるべきだ)

Only if one believe in something can he act purposefully. (人は何かを信じてはじめて目的をもった行動ができる) では、in 以下は修飾部分であって目的語ではない。従ってこの believe も自動詞である。自動詞のあとに言葉がくるには、間につなぎとして前置詞が必要になる(自動詞+前置詞=他動詞、と考える)。自動詞、他動詞にこだわるには相応の理由がある。

同じ動詞が前置詞をとるとらないで意味が違う場合

Jack called on his cousin at three.

(自動詞: 3時にいとこを訪問した)

Jack called his cousin at three.

(他動詞: 3時にいとこに電話した)

副詞と前置詞が紛らわしく、意味をとりにくい場合
She looked up the word in a dictionary.

(look は他動詞: 辞書で単語を調べた)

* up は副詞

She looked up at the sky.

(look は自動詞: 空を見上げた)

* up は副詞、at は前置詞

Unlike the spider, which stops at web weaving, the human child—and, I maintain, only the human child—has the potential to take its own representations as objects of cognitive attention.

この stop は自動詞で「止まる」(他動詞「...を止める」ではない)

(巣を張って終わってしまう蜘蛛とは異なり、人間の子供は(そして人間の子供だけがと私は言いたい)が)自己が表現したものを認識の対象として客観化する潜在能力を持っている)

The photographer's infinity begins at thirty feet from the lens of his camera.

この begin は自動詞で「(事が)始まる」(他動詞「...を始める」ではない)

(写真家にとっての無限は、カメラのレンズから 30 フィート離れたところで始まる)

総称用法

総称用法はその種類全体をあらわす「...なるもの」
a と the と-s(複数)で示される。

例:

A rat is larger than a mouse.

The rat is larger than the mouse.

Rats are larger than mice.

いずれも「野ネズミ(なるもの)はハツカネズミ(なるもの)より大きい」だが、
複数でいうのが一般的(aだと「ひとつの」theだと「その」と混同されやすい)。

the のほうが a より硬い感じ。

a は主語以外にはあまり使われない。

抽象名詞の場合は the がないと総称用法、the がつくと具体的なものを指す。

I never travel without books either in peace or in war.

ここでの本は何冊ぐらいですかと訊くと、たいてい
の人が首を傾げる。可算名詞で the が付かない複数
は総称用法で、「本なるもの」だから、冊数とは関係
ない。

peace と war は、不可算名詞で the が付いてい
ないから、これも総称用法で「平和なるもの」「戦
争なるもの」

(戦時でも平時でも旅には本が欠かせない)

If we are curious about things, we have no difficulty in learning about things.

things は、総称用法で、小さくは「物事全般」、大きくは「森羅万象」

(好奇心さえあれば物を学ぶのになんの雑作もいるまい)

When a writer conceives an idea he conceives it in a form of words.

a writer は、総称用法で、狭い意味では「作家」、広い意味では「物書き」。an idea は、総称用法でなく「ひとつの」(いろいろある idea のうち一つ)

(文章家がある思想を心に形づくるといのは、ある言葉を用いて形づくってゆくことなのだ)

By contrast, spiders, ants, beavers, and probably even chimpanzees do not have the potential to analyze their own knowledge.

ここの複数総称用法「蜘蛛、蟻、ビーバー、チンパンジーなる種」。knowledge は、their own で規定されているから総称用法ではない。

(それに比べ、蜘蛛や蟻やビーバー、そしておそらくチンパンジーにしたところで、自らの知識を分析する潜在能力は持っていないのである)

代名詞 it, this, that の指すもの

これが意外と知られていない。大学英語教員でもわかっていない人間が多いようだ(皆さんも英文講読でこのあたり、じっくりしない訳読解説を聞いた覚えがないだろうか)。

that : 直前に述べられていることを指す

this : 直前に述べられていることも、直後に述べられることも指す

it : その文脈で問題になっていることを指す(文中の語を特定化し得ないこともある)

例 : We are all equal in this, that we all have twenty-four hours in the day.

* this は以下に述べようとすることを指す。that は this の内容を示す(この場合の that は接続詞「...という」)。that 節は前の名詞 this に対する説明となる同格名詞節)

(我々は以下の点で平等である。即ち、人間には皆等しく 1 日 24 時間ある、ということだ)

* 即ち、と訳すのは翻訳の便法

More than once I was driven by necessity to beg from strangers the means of earning bread, and this of all my

experiences was the bitterest.

this は、前節全体を指す。

(一度ならず、やむを得ずして他人に生活の資を乞うたこともありますが、それは私の体験のなかでも一番嫌なものでした)

The listener to music is in a position similar to that of a poet.

that は、a position を指す。

(音楽を聴くひとの立場は詩人と似ている)

Which street? Where was it the boy had lived? The Cite Falguiere, that was it!

that は、直前の The Cite Falguiere を指す。it は、この文中で問題になっていること、すなわち「どこの通りだったかということ」。

(どこの通りだったろうか。どこに少年はいたのだった。そうだ、ファルギエール街、そうだった!)

年始の読者プレゼント(こういうきちとした読み方をすればお利巧になるというヒント)。代名詞に注意して自分で訳してみてください。

The animal, who a few seconds before had been sleeping peacefully, was now sitting bolt upright on the sofa, very tense, the whole body aquiver, ears up and eyes wide open, staring at the piano.

‘Did I frighten you?’ she asked gently. ‘Perhaps you’ve never heard music before.’

No, she told herself. I don’t think that’s what it is. On second thoughts, it seemed to her that the cat’s attitude was not one of fear.

好評発売中
2,300円＋税
4-334-961614

イーエル大学教授
久保恵美子・訳

富の独裁者
WORLD ON FIRE

世界を震撼させた
鋭い女性学者 衝撃のデビュー作

〒112-8011 東京都文京区音羽1-16-6 光文社
http://www.kobunsha.com

(市販書の訳)

ほんのすこし前までのどかに眠っていたネコはいま非常に緊張して、全身をふるわせ、耳をたてて、大きく見開いた眼でじっとピアノを見ながら、ソファに立っている。

「びっくりしたの？」と彼女はやさしく訊いた。

「きっと前に音楽を聞いたことがないのね。」

きっとそうなんだわ、と彼女はひとりごちた。そんなところだわと思った。だが、ネコの様子から察するに、どうもこわがっているのではないらしい。

直訳すると、「いや、と彼女は自分に言い聞かせた。それ(that)がそれ(it)が在るところのものであるとは、私は思わない」ですが、これでは何のことがさっぱり分からない。

公式をあてはめれば、

that : 直前に述べられたこと ネコがいままで音楽を聴いたことがないこと

it : 文中で問題になっていること ネコの様子が異常であること

つまり「音楽をはじめて聴いたから様子がおかしく

なっている」が、下線部の正しい意味。意をとって訳せば「いやちがう、そんなんじゃない」といったところ。解釈を誤ったのでつなぎの言葉(on second thoughts : 考え直して)が「だが、...ではないらしい」とつじつま合わせになっている。ここは最初の考えを思い直してみた No, she ~ 以下を引き継ぐ意識の流れだから「第一、...こわがってはいない。」とでもしたい。

訳がすらっと読めて、誤訳が隠される。これが翻訳の恐いところ。編集者もたいして英語ができるわけでもないし、また原文と付きあわせて読む時間がないから、あとになって翻訳の瑕疵がみつきり一悶着、というパターンはよく見聞きする。そんなわけで、編集者は新人を使うのを嫌ったりするのだ。逆にいえば、語法的に精確に読めている人であれば、最悪でも日本語表現(これは慣れと好みもあるし)の直しで済むから、抜擢の機会は多くなるはず。そう思ってこの連載も始めたわけです。皆様のご健康をお祈りし、活躍を期待します。

== 柴田耕太郎 主宰 [翻訳ジム] 受講生募集のお知らせ ==

2004年3月1日開講

1年間徹底して英文を読み解く全日制[翻訳ジム]のお知らせです

翻訳は教えられるか、というのがかねてからの自問でした。今は教えられないという結論に達しています。なのになぜ翻訳教室を開くのか。

私が開発したいわば「英文訓読」の手法で、受講生に一点の曇りなく読み解く技術を与えたいから。正しく読めさえすれば、あとは本人の文体の問題。ひとがとやかく言うものではありません。また、翻訳を商品として見た場合、現場を踏んだ

人間でなければわからぬ決まりごとがあります。その原則を受講生に伝えたいから。翻訳の瑣末な技術など知らずとも、きちっと読めてルールを知れば、翻訳は自ずからできると確信します。

人生のなかの1年間、毎朝、じっくり英文に取り組んでみませんか。あなたの中の何かが変わるでしょう。

<p>株式会社アイディ 柴田耕太郎 主宰 『翻訳ジム』 事務担当 前川 TEL : 03-3357-1189 FAX : 03-3357-4489 Email : educa@id-corp.co.jp 〒162-0054 新宿区河田町7-6 ID河田町ビル</p>

アラン・ターニー訳『THE THREE-CORNERED WORLD』

「文体と思想は切り離すことができない」と、ある文章家が述べています。思想を心に思い描くときは言葉を使って思い浮かべるものです。だから思想は言葉の影響力を逃れられません。表現が変わると、当然のごとく思想も変わります。つまり文体を変えずに表現される内容を変えることはできないというのです。

だとすれば翻訳とはいささか困難を極める作業でありましょう。書かれている内容はそのままに、文体どころか言語そのものを違えてしまおうという試みなのでから。とはいえそう嘆いていても始まりません。そこでこの「文体と思想は切り離せない」という法則を逆手にとり、少々気取って演繹的に考えてみますと、言語が変わっても文体を真似れば、より原著と等価の内容を読み手に伝えうるのではないかと思えてきました。わたくしの考えがここまで漂流してきたとき、ふとアラン・ターニー氏の英訳が思い浮かびました。氏の訳文はどこをとっても原著と文章のタッチが似ています。そのため脳裏にぱっと原文が思い起こされるのです。

Going up a mountain track, I fell to thinking.
Approach everything rationally, and you become harsh.
Pole along in the stream of emotions, and you will be swept away by the current. Give free rein to your desires, and you become uncomfortably confined. It is not a very agreeable place to live, this world of ours.
(アラン・ターニー訳、THE THREE-CORNERED WORLD、ピーター・オーウェン・リミテッド社 p7)

初めて目にしたとき、わたくしはどこかでこの文章を読んだことがあるような感覚にとらわれました。声に出して読んでみますと、一層馴染みのある感じが漂ってまいります。文章を一読して原著にお気づきになった方もおられるでしょう。そう、これは『草枕』冒頭部分の英訳です。

山路を登りながら、こう考えた。
知に働けば角が立つ。情に掉させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。
(夏目漱石著『草枕』新潮文庫 p5)

俳句のリズムで語られる、筋のない物語『草枕』は写生文としての完成を体現した作品と言われております。三十になる画工が山に入り、宿をとり、描くモチーフを見つけるというのが物語の大まかな展開です。物語に抑揚を与えるような事件はひとつとして起こりません。「余」なる主人公の思考が時間とともにゆるやかに流れていくのを読者が追いかけていくという小説。もしこれが俳句的な文体で書かれていなければ、日本情緒の持つ閑雅な雰囲気表現することはおそらくできなかったでありましょう。筋という、一般に小説の核となりうる要素を持たない『草枕』は、この文体あってこそその作品と言えるような気がします。ゾラに傾倒する自然主義が盛んだった発表当時の文壇の潮流と、『草枕』はひどくかけ離れています。漱石自身、「天地開闢以来類のない」とこの作品を形容しているほどです。

筋でなくリズムに重きがある文章を訳すのであれば、やはり訳文にもそのリズムを反映させられるかが鍵となるでしょう。ターニー氏の訳文には弾むような短いセンテンスが並んでいます。まず二行目から<命令法～and... / ～すれば...>の構文が三つ続きます。はじめに<Approach> <Pole> <Give>という動詞の原型があります。ポンポンと歯切れがよく、読みやすさを覚える魅力的な書き出しです。また、「智」「情」「意地」にあたる<rationally> <emotions> <desires>がどれも<,and>の直前にあることで、三語の意味あいぐっと心に残ります。この冒頭三文を読んでいると、英語でありながらまるで漢詩を読んでいるときのような音の抑揚を感じます。漱石の書いた冒頭文のリズムが訳文にのりうつったような印象さえ受けるのです。では、この後に続く文章を例に挙げて検証していきましょう。

When the unpleasantness increases, you want to draw yourself up to some place where life is easier. It is just at the point when you first realise that life will be no more agreeable no matter what heights you may attain, that a poem may be given birth, or a picture created. (訳本 p7)

住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩

が生まれて、画が出来る。(新潮文庫 p5)

字数に限界があるため、俳句は言葉に含みを持たせるといふ性質を持っています。原文の「引き越したくなる」というのも単に身体の物理的な移動ではなく、精神や思想の状態までを含んでいます。それを訳者は <draw yourself up> や、<no matter what height you may attain> と表現しています。長くて難しい語句を用いずに、どこまでも意味を広げていく点が両者に共通している特徴です。短く平易な単語の連鎖によりリズムが生まれるので、音の響きがとても心地よく感じられます。音に酔いしれながら文字としては表面に表れてこない意味を感じとっていき、それは俳句を吟ずるときの感覚にぞくりとするほどよく似ています。

『草枕』の特徴で、もうひとつ挙げたいのが画家の視点で描かれているという点です。色彩表現や造形表現が鮮やかに描写されています。冒頭もやはり、抽象概念であるにもかかわらず、ありありと眼前に浮かぶ光景のような印象を受けます。ところが驚いたことに英訳を読んでいても、原文を読んだときと同じような印象を受けるのです。

<Pole along in the stream of emotions> の部分はことさら情景が目浮かぶように感じられます。訳文は原著とは言語こそ異なりますが、等価の「映像」を読者の眼裏に思い浮かべさせてくれます。なので訳文を読んだときすぐに、これは『草枕』の英訳だろうと察しがつくのです。俳句のリズムに乗せられながら、この色彩豊かな映像が思い浮かんでいきます。ターニー氏がほかの訳者と一線を画していると思えるのはこういうところにあります。訳文を読んでいるだけで、原文が鮮やかに頭のなかへ甦ってくるのです。まずリズムが同じです。そして喚起される映像も同じです。目で追う文字はアルファベットでありながら、まるでそこに日本の侘しくも美しい自然の情景が浮かび上がってきます。英語で書かれた文章を読んでいて、日本の風景が瞬時に思い浮かぶという読書体験は、わたくしにとって初めてのことでした。そしてこれ以後、いまだ二冊目には出会っておりません。異なる言語であっても同じリズムと映像を読者に思い起こさせる、これこそ等価の意味を伝える翻訳と言えるのではないのでしょうか。

『草枕』を翻訳するにはリズム感を持たせることと、情景を喚起させる文章であることが重要です。その二つの点でターニー氏の訳は、まさに神業ともいえる鮮やかな等価の翻訳を実現しています。

ターニー氏の訳本を開くと扉にこんな文句が記されています。

“An artist is a person who lives in the triangle which remains after the angle which we may call common sense has been removed from this four-cornered world.” S□SEKI

表紙を開いて初めてこの文章を見たとき、「はて、どこかで読んだことのある文章だぞ」という気がしました。どこで読んだ文章だろうかとの記憶の糸をたぐりよせていますと、ふと『草枕』の本文にこれにあたる一節があったような気がしました。

して見ると、四角な世界から常識と名のつく、一角を摩滅して、三角のうちに住むのを芸術家と呼んでもよからう。(p35)

物事をありのままにとらえるのではなく、そこから一歩進めて感情のあふれる部分を非人情の面持ちで客観的に見ることが芸術になると漱石は言っています。この部分が『草枕』の根になる思想だと判断し、ターニー氏は冒頭に引用しておられるのです。扉にこの部分を引用したこと、そして『草枕』の表題を『The Three-concerned World』にしたことについてターニー氏は前置きでこう説明しています。

「原題の『草枕』とは旅を意味する枕詞だが、それをそのまま『The Grass Pillow』と訳しても、訳書にする読者には言外の意味が理解し難い。そこでこの作品の核であろうと思う部分を本文から抜き出し、表題とした」

このご配慮こそ、まさに非人情の境地。一歩離れた所から原文を眺め、必要なものを織り込み、必要でない部分を客観的に眺めて廃す。そうして極上の訳文をつくりあげていく。ターニー氏の『The Three-concerned World』は、訳書自体が独立した芸術作品として感じられる崇高な一冊なのです。